

魔界百物語

1

長編推理小説

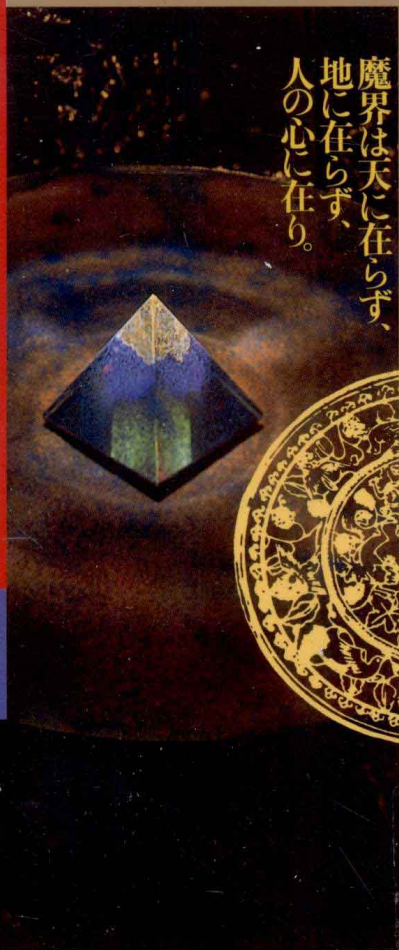
魔界は天に在らず、
地に在らず、
人の心に在り。

京都魔界伝説の女上

Kyoto Makai-Densetsu no Onna

Tatsuya Yoshimura

吉村達也



陰



光文社文庫

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編推理小説

きょうと ま かいでんせつ おんな

京都魔界伝説の女 (上) 魔界百物語①

著 者 よし ひら たつ や
吉 村 達 也

2003年 6 月20日 初版 1 刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿

印 刷 慶 昌 堂 印 刷

製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Tatsuya Yoshimura 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73500-2 Printed in Japan

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

京都魔界伝説の女(上)

魔界百物語①

吉村達也



光 文 社

目次

プロローグ 魔神降臨

9

第一部

超能力暗黒予言之部

一九九七年

17

第一章 春の悲劇

19

第二章 魔界案内人は語る

57

第三章 三つの顔を持つ女

95

第四章 報復の誓い

155

第五章 人格が割れる夜

194

第二部

世紀末分解殺人之路

一九九九年〜二〇〇〇年

293

第六章 氷室想介、京都へ

下巻 目次

第二部 世紀末分解殺人之路

一九九九年〜二〇〇〇年

第七章 ヒトの手首とサルの手首
第八章 絶叫！ 魔界ツアー

第三部 殺人犯心理分析之路 二〇〇〇年

第九章 過去を集める四人旅
第十章 追いつめられた仕掛け人
第十一章 凄絶なる結末
エピローグ QAZ

取材旅ノート

【上巻 登場人物】

鹿堂妃楚香ろくどうひそか……………自称超能力者。本名・竹之内美歌子たけのうちみかこ。別名・飯島千春いいじまちはる

竹之内彬あきら……………美歌子の父。鹿堂妃楚香の所属事務所社長

岩城伸光いわきののぶみつ……………私立大四年。資産家の放蕩息子。美歌子と交際

高柳卓也たかやなぎたくや……………マンションから転落した九歳の少年

高柳良恵よしえ……………卓也の母。息子の転落事故の責任を問われる

島崎昭三郎しまざきしょうざぶろう……………良恵の父。洋画家

高柳裕一ゆういち……………卓也の父。通信機器メーカー京都営業所長

高柳久乃ひさの……………裕一の老母

いちやなぎじろう
一柳次郎……………魔界案内人

ひじりばしろういちろう
聖橋甲一郎……………スーパーマルチ学者。世界規模の歴史再構築を提唱

むかいなつみ
迎奈津美……………語学の天才少女。聖橋博士の助手。十四歳のとき父を失う

とうま
迎東馬……………奈津美の父で、聖橋博士の元助手。不慮の事故で他界

たまるいわお
田丸巖……………警視庁捜査一課警部

かもしたひでただ
鴨下秀忠……………京都府警捜査一課警部

くすのき
楠キヨ……………百歳を越す老婆。嵯峨野の氷室想介宅の大家

かわいまい
川井舞……………氷室想介のアシスタント

ひむろそくすけ
氷室想介……………サイコセラピスト
精神分析医

京都魔界伝説地圖(洛中)



本文中の全写真撮影・吉村達也
(P. 335のみ六道珍皇寺提供)

ブローグ 魔神降臨

いにしえの都は、その夜、猛烈な雷雨に見舞われていた。

とどろく巻く黒雲の奥で怒り狂う雷の神は、ドロドロ、ドロドロ、と不吉な前兆の太鼓を低く轟かせ、つづいてロケット花火を打ち上げるようなシュパーンという爆発音とともに、ジグザグの閃光を古都めがけて投げ下ろす。

一本、二本、三本――

光の矢が夜空を走るたびに、漆黒の闇は銀色に輝き、実像と二重写しになった影の世界が鮮やかに浮かび上がった。

一瞬の稲妻が収まると、光と影とに分離していた古都の寺院や森の木々が、そして雨に追いかけられながら町を走る人々の姿が、またひとつの実体に合わせて元の形に戻る。

しかし新たな稲妻で、ふたたびそれは光と影とに引き裂かれた。その繰り返しが先刻来つづいている。

やがて雷鳴が少しだけ鎮まると、こんどは篠突く雨の激しさが耳についた。

音楽でいえばクレッシェンドの記号で表わされるような、小から大へと増幅するその雨音は、雷鳴とは違った不安を人々の心に^{おそ}び込ませる。

京都洛中^{らくちゆう}を東の丘から一望に見下ろすことのできる將軍塚^{しやうぐんづか}——
晴れた夜ならば、恋人たちが古都の輝きを眺めながら愛を語らうその場所に、いまは車の姿もカップルの人影もない。

だが、たったひとりだけ、傘も差さずに展望台に立ち、断続的な稲妻に照らし出される夜の京都をじつと見つめる人物がいた。

雷雨がいちだんと激しさを増すにつれ、その人物の頭から流れ落ちる雨水は滝のようになる。顔や手の先など露出している部分はもちろんのこと、衣服もずぶ濡れである。

それでもその人物は微動だにせず、雨に煙る夜の京都を無言で見下ろしていた。

片手には、傘を持つ代わりにチャック付きのビニールポーチが抱えられている。

その中には分厚い一冊の本が入っていた。雨粒に覆われたビニールポーチ越しでは細かいところまではよく判別できないが、古色^{こしよくそうぜん}蒼然とした枯葉色の表紙に、焦げ茶の筆文字で書物の題名が記されているのが、かろうじて透けて見えた。

《陰陽大観》

長い年月が経過しているためか、その題名を記した活字はひどく色褪せていた。

本の厚みはごく一般的な単行本の二冊分ほどもあったが、中の紙も茶色く変色してしまっている様子が小口こぐちのところで見とれた。

ピカッ、とまた真昼の明るさで閃光が輝いた。

將軍塚の展望台に立つ人物が、全身に銀色の光を浴びた。

その瞬間、透明のビニールポーチをびっしり覆っている雨粒の下から、それまであまりよく見えなかった「陰陽大観」と書かれた書物の題字が、人魂ひとたまに照らされたような不気味な輝きを放った。

夜空を貫いた稲妻が収まり、周囲に闇が戻っても、「陰」「陽」「大」「観」の四文字は燐光に似た緑白色の輝きを蓄えたままだった。

「陰陽大観……」
おんみょうたいかん

その人物は、妖しげな光を放ちつづける題名の活字を、小さな声で読み上げた。

「陰陽大観」

と、また繰り返す。と、そのあと突然――
キューエイゼット

「QAZ……私の名はQ―A―Z……」

おどろおどろしい雰囲気ふんいきの書物とは似ても似つかぬ近代的な響きのコードネームを口にした。毎日の暮らしで使っている本名とは別の、その特別なコードネームで自分を呼ぶのは、別人格に移り変わるときに欠かせない重要な儀式だった。

このコードネームには秘められた意味があり、決して適当に名付けたものではなかった。その人物の手にある「陰陽大観」なる古色蒼然たる本と密接に関係のある記号なのだ。

「菅原道真の時代より」

QAZはつぶやいた。

「怨霊は雷とともに降りてくる。そして今宵、この激しい落雷の嵐とともに、魔神が現代に蘇る」

パシューンという炸裂音とともに、またも古都のパノラマが光と影に分離して輝いた。

落雷の閃光は、將軍塚の高台に立つQAZの姿をふたたび青白く照らし、地面に叩きつける雨音は耳を聳するまでに大きくなってきた。

流れる雨の作るよじれた糸模様がQAZの顔一面を覆い、そこに稲妻の光が投影されて、さまざまの表情を描き出していく。

「私は狂気の伝道師」

誰ひとり聞く者がいないのに、QAZは語りつづけた。

「私の仕事は『陰陽大観』に記された魔界百物語を、ひとつひとつ人間界へ運んで実現すること」

QAZはそこで目を閉じ、荒れ狂う天を仰いだ。土砂降りの雨が、猛烈な勢いでQAZの口の中に流れ込んでくる。

QAZにとってこの雨は、怨霊のエネルギーに満たされた特別な水だった。雷の夜に降る雨は、神から賜った奇跡の水といってもよいものだった。神とは、ただの神でなく、魔神である。その「御神水」をジョボジョボという音がするまでたっぷり口の中に溜めたところで、QAZはゴクリと喉を鳴らして一気に飲み干し、顔の向きを元に戻した。

「陰陽大観の巻頭にいわく」

目を閉じたまま語るその言葉は、もはや独り言のつぶやきではなく、高らかなる宣言と呼ぶべき大声になっていた。

「魔界は天に在らず、地に在らず、人の心に在り」

QAZはもういちど繰り返した。

「魔界は天に在らず、地に在らず、人の心に在り」

そしてQAZはカッと両目を見開き、足元に広がる夜の京都を睨みつけた。

「魔神降臨の第一の場所は、京都！」

その瞬間、これまでで最大規模の光の矢が、とぐろ巻く黒雲から投げ下ろされ、空ぜんたいが紫色に光った。

つづいて腹を揺るがす轟音が鳴り響き、豪雨に煙りながらもその存在を輝かせていた古都の街明かりがすべて消えた。

全都停電――

一瞬にして、眼下の光景に漆黒のカーテンがストーンと降りた。

月もない、星もない、そして人工的な明かりもすべて失われた暗黒の夜は、いまから千数百年を遡る、いにしえの都の姿とまったく変わりがなかった。

洛中を一步外に出れば、そこに腐り果てた死骸が累々と横たわり、冥界からの使いであるカラスがその死者の肉をついばみ、腐臭漂う地獄絵図の中を人の形をした魔物が蠢き、奔走あう——そのころと寸分変わらない暗黒の光景が、いまここに再現されていた。

Q A Zの目には見えているのだ。

照明という名の第二の太陽を失い、否応なしに原始の闇に包まれた魔界都市・京都の至るところで、千年の、いや数千年の時の流れを経て眠りから覚めた魔物たちが、ギョロリ、ギョロリと目をむき、そして舌なめずりをしながら、獲物を求めて這い出そうとしているのが……。

「いま、永遠の眠りから覚めた魔物たちよ！」

Q A Zは闇に向かって両手を広げて叫んだ。

「吠えよ！ 叫べよ！ そして人間どもを食い物にせよ！ さあ、おまえたちがふたたび立ち上がるべききたのだ」

そしてQ A Zは口をつぐんだ。

光を失い、音だけになった世界で、天から浴びせられる洪水のすさまじさは、鼓膜をつんざくまでに激しくなっていた。

京の町は依然として闇に包まれたままである。

街明かりの煌めきが蘇るきざしは、まだ少しもない。

西暦一九九三年のことである――